

ミスターヌードル

あんどう ももふく
安藤 百福 (1910-2007)

日清食品



日清食品
株式会社提供

§ 人物データファイル

出生

明治43年（1910）3月5日、日本統治時代の台湾の台南県東石郡朴子街に生まれる。兄が2人、妹が1人の4人兄弟である。

生い立ち

百福の父は相当な資産家だった。しかし、幼いうちに両親を亡くした百福は、台湾で織物を扱う呉服屋を営む祖父母の元で、商家らしく商売や家事などを手伝うよう厳しく育てられた。14歳で高等小学校を卒業すると、祖父の仕事を手伝い、商売の機微を肌で学ぶ形となった。

20歳頃、高等小学校時代に書生として世話になっていた人から勧められ、街に初めてできた図書館の司書となった。ここで多くの書物を拾い読みし、知識を吸収した。百福の学歴や当時の状況からすると好条件の司書という仕事であったが、活気のある商家で育った百福にとって静謐な図書館は性に合わず、2年で辞することとなった。

実業家以前

百福が初めに事業を起こし独立したのは、昭和7年（1932）22歳の時であった。台北市永楽町に資本金19万円の「東洋莫大小（メリヤス）」という会社を設立し、日本内地から製品を仕入れて台湾で販売した。「誰もやっていない新しいことをやりたい」と、繊維業界の動きを調べるうちに、大発展する可能性のあったメリヤスに注目。編み物のメリヤスを扱う仕事であれば、織物業を営む祖父と競合しないという配慮もあった。創業資金は祖父が管理していた父の遺産を役立てた。この事業は大当たりし、翌年には大阪に進出している。

事業が軌道にのってくと、これからの時代は学問を修めていないと肩身が狭いと思うようになり、立命館大学専門学部経済科（夜学）に入学。社員も増え、社長として出張等も多く、満足に通える状況ではなかったが、大阪進出の翌年、昭和9年（1934）に24歳で修了している。

その後百福は次々といろいろな事業に手を染めた。第二次世界大戦で繊維の貿易業務は継続できなくなったものの、戦時下でも幻灯機や軍用機用エンジン部品やバラック住宅の製造、炭焼きなど次々に事業を起こす。その時軍用機エンジン工場で資材横領のあらぬ疑いをかけられ、拘束・拷問を受けるなどの事件もあった。

終戦直後は、土地が安く手放されていたため、久原房之助のアドバイスにより、大阪の中心街心斎橋ほか御堂筋や大阪駅前など相当の土地を手に入れている。また、戦後も製塩所や専門学校開設などを手掛け、この頃に後の日清食品となる中交総社（途中サンシー殖産に商号変更）も設立している。同時に「国民栄養科学研究所」を設立、栄養食品の研究を始めており、後の日清食品での開発に役立つことになる。

しかし、製塩所の若者に渡していた小遣いへの源泉徴収を怠っていたとして脱税容疑がかかり、製塩所や自宅は立ち退き処分、百福自身は巢鴨の東京拘置所に収監されてしまう。この処分を不当とした百福は、取り消しを求めて逆に税務当局を提訴。弁護団を組織した法廷闘争は2年に及んだが、残された家族を思い、訴えを取り下げて即時釈放となった。

やり手の事業家、資産家として名が通っていた百福は釈放後の昭和26年（1951）11月、請われて大阪で新設された信用組合の理事長に就任する。しかしこれが破綻、百福は理事長として責任をとり、大阪池田の自宅を残してすべての財産を失ってしまった。

実業家時代

無一文になってしまった百福の頭に浮かんだのは戦後窮乏の時代に見たラーメンの屋台の風景であった。家庭でお湯があればすぐ食べられるラーメンを開発しようとしたのである。自宅の裏庭に研究用の小屋を建て、手探りの状態で研究を始めた。昭和32年（1957）百福47歳であった。おいし

くて飽きがこなく、保存性があり、調理に手間がかからず、安く衛生的というのが目標の味付即席麺である。長期保存に耐えるように麺を乾燥させるのに用いた瞬間油熱乾燥法は、妻が調理していた天ぷらから思いついたというのは有名な話である。1年がかりでチキンラーメン★の完成にこぎつけ、1日400食の製品を家族総出で作った。

試作品を知人に食べてもらい、海外へも送り、百貨店の食品売り場で自ら試食販売を行い、手ごたえを得た百福は、知人から100万円の借金をして古い倉庫を借り、工場に改装、休眠していた「サンシー殖産」で1日1200ケース生産でスタートを切った。当初問屋では今一つの反応だったが、次第に注文が殺到し始め、チキンラーメン発売から4ヵ月後の昭和33年12月20日、商号を「日清食品」と改めた。「日々清らかに豊かな味を作りたい」という願いが社名に込められた。

昭和34年（1959）三菱商事、伊藤忠商事、東京食品が販売の特約代理店となり、強力な流通組織を得た。また、増産のため高槻本社工場を建設した。欧米型流通システムを持つダイエーなどのスーパーがオープンして大量販売ルートが開ける一方、新しいメディアであるテレビコマーシャルの利用など、時代の追い風に乗れ、創業5年目で年商43億となり、昭和38年（1963）東京・大阪証券取引所市場第二部に株式上場、昭和46年（1972）には東京・大阪証券取引所市場第一部に上場した。

一方、チキンラーメンの評判が上がるにつれ、粗悪な類似品が出回るようになった。昭和36年（1961）チキンラーメンの商標登録が確定し、昭和37年には「味付乾麺の製法」「即席ラーメンの製造法」が特許登録された。業界の混乱に対し、食糧庁長官から「業界の協調体制を確立するように」との勧告があり、昭和39年（1964）64社が参加して「日本ラーメン工業協会」（現・社団法人日本即席食品工業協会）が設立され、その初代理事長となり、製法特許権を公開した。また、加工食品で初めて商品に製造年月日を記載した。

昭和41年（1966）海外進出を図るため、欧米を視察した。欧米にはどんぶり箸で食べる習慣がなく、カップとフォークで食せるものが必要と痛

感し、昭和44年（1969）カップヌードル開発に着手。昭和46年（1971）完成、発売にこぎつけた。カップヌードルが爆発的に売れるきっかけの1つとなったのは、翌年の「浅間山荘事件」である。厳寒の現地で機動隊員が湯気の上がるカップヌードルを食べているのがテレビに大写しになったのである。

その後、食糧庁長官からの相談を受けて開発、発売した即席米飯の「カップライス」は、原材料のコメが高価なため即席麺との価格競争に勝てず失敗に終わった。30億円を投じた事業だけに撤退は苦渋の選択であったが、早めの決断が奏功し、経営に与える影響は少なかった。

社会・文化貢献

昭和23年（1948）、名古屋に中華交通技術専門学院を設立している。仕事のない若者を集めて奨学金を与え、技術を身につけさせたいと、自動車・鉄道の知識を総合的に習得できる学院をめざした。この学院は、のちに名城大学の工学部の一部となっている。

各種奨学金制度も私費を投じて設立している。

昭和55年（1980）カンボジア難民救済にインスタントラーメン10万食を寄贈。平成7年（1995）阪神・淡路大震災では100万食以上の救援活動を行ったほか、新潟県中越地震、スマトラ沖地震など、災害時の救援活動に迅速に対応している。

昭和58年（1983）財団法人日清スポーツ振興財団（現・安藤スポーツ・食文化振興財団）を設立、全国小学生陸上競技交流大会などを後援し、指導者の表彰も行ってスポーツ振興に力を注いだ。

晩年

昭和60年（1985）経営陣の若返りを図るため、息子の宏基に社長を譲り、代表取締役会長となった。仕事上一段落した百福は、この前年から日本各地の郷土料理を巡る旅に出て広告記事として新聞連載した。昭和62年（1987）には中国大陸へ麵料理の取材に出かけている。

平成17年（2005）取締役退任、創業者会長（経営執行権のない名誉職）に就任。退職金全額を安藤スポーツ・食文化振興財団に寄付、その後も毎

朝誰よりも早く大阪本社に就社し、終業時間まで勤務していた。社長を息子に譲ってからも、名誉職となっても、気持ちは経営者であり続けたようで、宏基との口論も絶えなかった。

平成19年（2007）年明けも家族と屠蘇を祝い、2日にはゴルフを楽しみ、4日の年頭の仕事初めも風邪気味ではあったがつつがなく全うしている。1月5日、急性心筋梗塞のため市立池田病院で死去した。享年96歳。生涯現役であった。墓は大阪市北区同心町・浄土宗九品寺にある。

関係人物

田中龍夫 元自由民主党衆議院議員。田中義一元首相の長男。通商産業大臣、文部大臣を歴任。岸派以来の福田赳夫派の幹部として重きをなした。百福は、当時総理大臣だった田中義一を紹介され、その子息田中龍夫と親しくなる。やがて田中龍夫が政界入りしたことで、百福も佐藤栄作、福田赳夫、小泉純一郎ら歴代宰相の交誼を得ることになった。田中龍夫が山口県知事選に出馬した際には、百福が資金面でも応援している。

久原房之助 日立製作所の母体となった日立鉱山をはじめとする久原財閥を築いた。のちに実業界から転身して田中義一内閣の通信相に就任した。田中義一亡きあと、若い田中龍夫の後見人として田中家の面倒を見た。百福は田中龍夫と連れ立ってよく久原邸に遊びに行き、細かいことによく気が付く性格が気に入られ、久原房之助にかわいがられた。久原は、百福の人生の節目節目に相談に応じ、助言をし、支えてくれた人物である。

安藤宏基 日清食品ホールディングス株式会社代表取締役社長・CEO。百福の次男。慶應義塾大学商学部卒。アメリカ合衆国コロンビア大学留学などを経て、昭和48年（1973）日清食品に入社。マーケティング部長時代には「日清焼そばU.F.O.」「日清のどん兵衛」などといったヒット商品の開発を手がけた。昭和60年（1985）、37歳の若さで社長に就任。「打倒カップヌードル」をスローガンに社内活性化に取り組み、ブランド・マネージャー制度による競争構造を導入するなど、大胆な社内改革を数多く行っている。

エピソード

外国人記者から、「インスタントラーメンは体に良くないのではないか」という皮肉な質問を受けると、「私は創業以来毎日インスタントラーメンを食べてきましたが、90歳になってもこんなに健康です」といつも回答していた。

運動はもっぱらゴルフを愛し、毎年100回以上のプレーをこなし、それは90歳を過ぎても変わらなかった。

キーワード

チキンラーメン インスタントラーメン開発中、鶏をしめるところを見ていた息子宏基が鶏肉を食べなくなった。しかし、鶏でとったスープでラーメンを出すと喜んで食べたので、スープはチキンで取ることに決め、開発中、チキンのスープを「チキン」と呼んでいた。それでそのまま商品名がチキンラーメンとなった。

神奈川との関わり

もともと台湾で生まれ育ち、大阪を中心としていた百福は、神奈川と深いかかわりはない。

日清食品の横浜工場は、昭和36年（1961）に横浜市戸塚区上柏尾に用地確保、同39年にわずか7ヵ月の突貫工事で完成している。ここは昭和42年（1967）までは東京支店も兼ねていた。が、平成8年（1996）に規模が小さく生産性も低下していたため休止。現在は営業所のほか、低温開発研究所が置かれている。また、日清食品が100%出資して平成元年（1989）に設立した、チルド製品の製造販売をする「株式会社明星フレッシュ」が綾瀬市早川にある。

昭和55年（1980）には、神奈川県と災害への救援活動に関する協定を締結している。

平成23年（2011）9月17日、横浜みなとみらいに「カップヌードルミュージアム（正式名称：安藤百福発明記念館）」をオープンさせている。

§ 文献案内

著作

『日本の味探訪 食足世平』安藤百福著 講談社 1985〈未所蔵〉

『日本の味探訪 食足世平 続』安藤百福著 講談社 1987〈未所蔵〉

昭和59年（1984）から足かけ3年にわたり、日本の伝統的な食文化を知り伝えたいと、百福が日本全国の郷土料理を取材し、広告連載したものの一部。初巻には巻末に食文化研究の第一人者石毛直道との対談が掲載されている。

『食の未来を考える 「郷土料理に学ぶ」食と健康フォーラム1986』安藤百福編 日清食品 1986〈Y〉

『苦境からの脱出 激変の時代を生きる』安藤百福著 フーディアム・コミュニケーション 1992〈Y、K〉

百福の語録と、その言葉を生むきっかけとなったエピソードや解説が書かれ、時代順に編集されている。自伝文献としても読める。

社史

『食足世平 日清食品社史』日清食品 1992〈Y、K〉

同社30年史。創業前史として創業者百福の生い立ちから始まり、平成4年（1992）までの社史が記述されている。百福は常に日清食品とともにあったため、要所要所に百福の言動の記載がある。

『食創為世 40周年記念誌』日清食品 1998〈Y、K〉

30年史のダイジェストに、平成年度に入ってから企業の活動が加えられている。

『日清食品50年史』日清食品 2008〈Y、K〉

一見巨大なチキンラーメンに見えるユニークな装丁の社史。外袋を模したビニールの中に、麺を印刷して合わせて凹凸のある箱に入っている。中は、「日清食品創業者 安藤百福伝」「日清食品50年史 創造と革新の譜」「映像でつづる日清食品の50年（DVD）」の3点組になっている。「百福伝」が独立しているため、「50年史」の冊子には、百福に関する記述は少なく、現社長宏基についての記載が増えている。

伝記文献

「安藤百福」『私の創業時代』日経ベンチャー編 日経B P 1989
p25-34 〈K〉

『魔法のラーメン発明物語 私の履歴書』安藤百福著 日本経済新聞社
2002 〈K〉

インスタントラーメン開発、日清食品の発展を中心とした平成14年（2002）
までの自伝。巻末に、麺の源流を探る中国への旅の紀行文をまとめた「麺ロー
ドに行く」を収録。

『日清食品創業者 安藤百福伝』 日清食品 2008 〈Y、K〉

社史欄にあげた『日清食品50年史』の第1分冊。百福の一生が写真、イラス
ト入りでコンパクトにまとめられ、わかりやすい。巻末に年譜あり。

¶ 参考文献

『カップヌードルをぶつつぶせ！』安藤宏基著 中央公論新社 2009 〈K〉

一代で日清食品という大会社を築き上げた偉大なる百福を父に持った宏基。
父との葛藤を超えて、創業者百福とは一味違う経営論を語る。

「カップヌードル40年目の最強論」 うれぴあ 創刊号 2011
p106-115 〈未所蔵〉

<小松晶子>